

教育映画祭優秀作品賞



家族とは何か？

ゆれうごく現代の家庭に
今…

あらたな心のつながりを問う

企画 貯蓄増強中央委員会
製作 株式会社 桜映画社

家族の構図

文部省選定

社会教育映画 劇 カラー31分

¥ 170,000

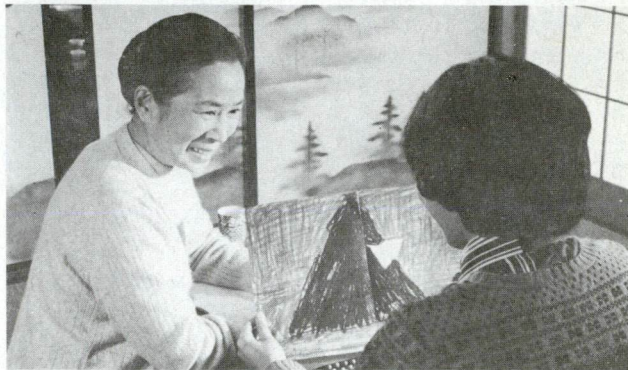
□製作意図

家族は、いうまでもなく、運命的な生活協同体であり、人間の社会生活の単位である。私たちは、社会生活を営むと同時に、この家族の中に生きている。したがって私たちの「幸せなくらし」は、「幸せな家庭生活」、「幸せな家族関係」の中できずかれると言っても過言ではない。

父と母のかかわりあいと、子どもたち、それときには、他の家族の一員であった嫁も加わり、老人をかかえる場合もある。この複雑な人間関係をどのように維持するか、私たちの日々の幸せはかかっている。

この映画では、父の死後の母を中心とした家族関係が描かれていくが、全篇に屈折した影をおとしているのは、生前一家を支えていた父である。その父親との関係、さらに父と母と子どもたち、姑と嫁の関係などが、現実の場面に、回想場面を絡ませながら、展開されていく。物語の展開につれて母親の心境が変化していく。その心の鏡に、家族の人間関係のあり方、そして子どもの教育を含めた家族の生活設計、人生設計のあり方が映し出される。

この映画は、今日のように社会的条件が複雑な中で、生活設計の大きな課題として、「家族の構図」をどのように画いたらよいかを考えさせる。



□対象 青年、成人

特に PTA、家庭教育学級、地域婦人団体等

□用途 家庭生活（家庭の人間関係）

□利用方法

○各種婦人団体、PTA等で行う研修会や講演会における「幸せな家庭生活の基礎は何であるか」「幸せな家族関係をどのようにしてきずくか」「生活設計をどうたてたらよいか」等の教材。

○映画会—公民館・図書館等の主催する「優秀短編映画をみる会」に上映して、PTA青年・婦人団体の集会時に利用をすすめる。

製作

株式会社

桜映画社

東京都新宿区西新宿1-22-1
スタンダードビル TEL(342)5768

取扱店



□あらすじ

台所の実権を嫁の絢子に譲ったたか子は、時には口にあったものがたべたいと、台所に手を出して一悶着。亡き夫の霊前に回想する一ある日曜日の朝、縋袍を着た夫が戸棚からウイスキーを持っていく。酒だけが生甲斐なんだからと嫁の前で夫をけなし、息子の英一が小学生の時描いた「おとうさん」という題の絵をみせた事を思い出す。出来のいい息子の英一だけがたか子の生きがいだった。そしてあの頃はたか子は一家の主として君臨しているつもりだった……

台所の一件で気嫌の悪いたか子は夕食も食べない。絢子はいやがらせだといい、とてもこれから一緒に暮せないと夫に訴える。

翌日、たか子は次男の正二の電気器具店を訪れる。思いがけない母の来訪に戸迷う正二。たか子は部屋に入るなりそこにある本棚は不恰好だとけなす。その本棚は亡夫と正二が丹精こめて作ったものだったのだ。たか子は夫が度々正二の下宿を訪れていた事を知る。来ると人が変わったように鼻歌を口ずさんでカーテンを縫ったりした。正二が高校を出たで、ぐれてぶらぶらしていた頃、父の勤めている木工所に小遣を貰いに行った事があった。そこで正二は、少年工員に大いに頼りにされている父の姿をみる。父は、お前もしっかりやれと激励してくれた。この店を紹介してくれたのも親父、俺のためにと月々積立をしてくれていたのも親父。——又ある時親父と一緒に飲みにいった。「俺は親父っ子、兄貴はおふくろっ子、どっちが成功するか勝負だ。おふくろは親父の苦勞を全然わかつちやいないんだ」という。すると「お母さんの悪口をいうな、お前の母親じゃないか」と父は正二をたしなめた。——正二に夫は最後まで自分をかばってくれていたと聞き、又兄貴の処に居づらくなったらいつでもここにおいでといわれて、たか子は思わず泣きだしてしまう。

いく日かたったある日、夫の墓前に正夫の成長を報告するたか子の姿がみられた。たか子は、新しい出発を旨とする自分の決意をも物語。この日からたか子は変わった。絢子もその事に気付く。

正二の恋人美佐子に会ったある日、美佐子に、たか子は思わず「私達夫婦は助けあい認めあってきた、夫婦はお互いに認めあう事が大切です。」と嘘をついてしまう。正二は電話で嘘をわびるたか子に「僕達の幸福を願う母さんの気持ちがいれしかった」と逆にはげます。

絢子は、自分の道を見つけて生きていこうとする姑の出発を知り些細な事にこだわっていた自分を反省し新しい生き方をさぐりはじめる。正二と美佐子、そしてたか子、絢子とそれぞれに新しい門出を迎える。

□製作スタッフ

製作	村山英治
脚本	須崎勝彌
監督	村山英治
撮影	金子精吾
照明	江連高元
編集	平田光治
音楽	守随房直

□出演者

南	美	江
佐古正人	立石涼子	小川隆一
大池育子	山本	
金井	大	

□話し合いの要点

1. 事前の話し合い

「幸せな暮らし」というのは、「円満な家族関係」をもとにしてつくられる。お互いの家庭では、家族関係をどのように整えているか。その中でどんなことが問題になっているかについて話し合う。

2. 映画

この映画は、修平一家の夫婦、親子、兄弟、息子・嫁・姑の家族関係を描くために①夫婦・親子のあり方が、子どもの教育を含めてその将来に大きな影響を与えているものであることを見取り、②円満な家庭の人間関係をつくるには、家族のひとりひとりがどのような配慮をすべきかを考える資料とする。

3. 内容の探究

映画の内容を分析し、その中に含まれている問題点を摘出し、なぜそうなったか、それはどうすればよかったかを検討して、わが身への指針を考えていく。

①嫁が台所の実権を持つとはどういうことか。

②英一が小学校一年の時描いた「お父さん」の絵を持出してきたたか子の意図は何か。

③たか子に希望を託され大事にされた英一は、姑と嫁のいざこざに、「うまくやれ」と逃げをうつ。一方、母からうとんじられた正二は次第に立つ腹をおさえて母をもてなそうとする、この違いはどうしてできてきたのだろうか。

④正二が木工所を訪れた時、父親が少年工員を親切に指導している姿に接して、どんな印象を受けたか。

⑤「俺（正二）は親父っ子、兄貴はおふくろっ子、どっちが成功するか勝負といくか」こんな考えが子どもにできるのはなぜだろうか。

⑥正二が激しく母親を非難した時、修平は「お母さんの悪口をいうな、お前の母親じゃないか」と正二の頬をなぐる。この時の修平の心境はどうなんだろうか。また、修平のこんな気持ちを、たか子はなぜ理解できなかったか。

⑦英一も家庭生活の責任を妻に押しつけているようだが父親の座を守っていると言えるか。

⑧修平の墓前に、たか子が述懐することばは、たか子が正二によって開眼されたものとしてかみしめたい。（夫婦、親子の共感的関係と共に個別的存在として尊重すべきことの理解）

⑨英一「父親が下宿人だということは、男の子にとってむなしいことだよ」という述懐について、あなたはどうか考えるか。

⑩たか子が美佐子に、自分の自責と悔恨を裏返しに表現する。そのうそをあなたはどうか思うか。その中で、「夫婦はお互いに認め合わない」といっているのは重要。

⑪絢子が人形づくりを習い始めた動機は？

4. まとめ

①修平、たか子それぞれの、父親、母親としての問題点は何か。これが英一や正二にどのように影響しているか。

②修平一家の家族関係から、われわれは何を学びとるか。

③さてふりかえってわが家の「家族の構図」はどうであろうか検討してみよう。